

投句欄 自由律の泉 ⑧

- 1 どこにいる スマホがないている 緯 迎雲
- 2 問診表に書き切れない七十七歳の病歴 白松いちろう
- 3 コロナの大罪オンライン画面に  
　　パパーと泣き叫んでいる ちば つゆこ
- 4 台所の窓の夕焼け冷凍秋刀魚焼き上がる 大岳 次郎
- 5 頻尿に断たれた夢は未練タラタラ 檜 幽可
- 6 折鶴羽をひろげる空の深さ 棚橋 麗未
- 7 車椅子の妻は野花に触れて吾を見返る 小山 榮康
- 8 ひとりの夜を命ひとつ抱いて寝る 久光 良一
- 9 虹産まれる古本屋の再開 野谷 真治
- 10 商店街の夏 うなぎ焼く煙を食す アカホリ フキ
- 11 治らんのなら獣のように隠れて燐火となろう 植田 博
- 12 出口のある迷路ならいいのだが 田辺 まさゆき
- 13 風の横槍に吹っ飛んだ一服 無 一
- 14 雨あがり会いたいあじさい 金澤 ひろあき
- 15 片手鍋十八センチの使い良さ 和寄 はると
- 16 やわらかな耳のあの子が駆けてくる 黒瀬 文子
- 17 ぼーっと生きるのも好いよとナスの曲がり 佐瀬 広隆
- 18 初恋の恋衣君語る 田中 美太
- 19 近くで戦いがある 電源をお切り下さい 井尾 良子
- 20 灯りがついて帰られたようなホッと歩く 富永 鳩山
- 21 生まれつき曲がってヘソと奥歯のレントゲン 富永 順子

22 ひとしきり酔って妻のマグカップ洗う夏宵

さいとう こう

23 天の川も溢れる集中豪雨

荻島 架人

24 帰って来たホトトギスと夜明け待っ

部屋 慈音

25 たまたま運がよかっただけの当りくじ

平岡 久美子

26 コロナ前のお迎えで良かったねお父さん

石竹 和歌子

27 蝙蝠が落とした物語のはじまり

佐川 智英実

28 アップパップの母 試作のカード入れは「良いあんべ」

稲垣 光苑

29 カロリーを見てパンを戻す

明日原 夏斗

## ● 泉 ⑦より 一句鑑賞

抽斗の奥の昭和も遠くなる

棚橋 麗未

▼昭和という抽斗にしまった思い出の数々、平成が終わり今は令和の時代、昭和が段々遠くなるのも実感です。しかし、電気製品は無くても昭和の家族は良かったです。

(ちば つゆこ)

▼私の机も、ほとんど昭和のものは無くなりました。机を掃除しなおそうと思いました。

(田中 美太)

コロナ騒ぎ葦の髄から世間見る

平岡 久美子

▼誠に思うことは、新型コロナをどの位自分が理解しているかわからないということです。フェイクニュースも多いだろうし、解明できたのはどの位なのでしょう。人知の及ぶところではありません。知った積りになってます。

(大岳 次郎)

食い違いに沈黙を選ぶ

部屋 慈音

▼存外その選択が平和への近道の一つなのかも知れない。が、その真逆も在る。煽り運転等も、その典型の一つと云える。理屈でコントロール不可能なのが感情である。

(檜 幽可)

▼作者が選んだ「沈黙」、相手と言い争う気は無くも、相手の意見・考えに同意する気はない「沈黙」、と見ました。

(無 一)

▼沈黙を選んだ事に自分でも自問自答しているのでは……と思いました。きつと反論したい事があったが、言っても仕方ないと結局沈黙を選択した。良かったのか？ 揺れの心境に共感しました。

(黒瀬 文子)

階段ふたつ飛ばしあれば初夏の太陽

さいとう こう

▼若さの何と澁刺たる姿、身も心も太陽に負けない躍動感、「若さ」って本当に素晴らしいですね。階段をふたつ飛ばす澁刺たる姿、充実感あふれる作品に思わず背伸びをしたくなりました。

(棚橋 麗末)

▼ふたつ飛ばし初夏の太陽。爽やかさを感じさせる。あれはで思い出なのか今見ているのか読み手は想像する。目の前が清々しい眩しい句。

(萩島 架人)

▼「ふたつ飛ばし」という表現に若さと健全さを感じます。暑い夏に気が滅入るばかりですが力を頂きました。

(佐川 智英実)

おとしの素麺ゆでてる自粛の春

富永 順子

▼身につまされる句でした。私は妻亡きあと、句のようにして夜を迎えています。

(小山 榮康)

▼ステイホームで、たつぷりの時間のお陰様で自家野菜(大根、胡瓜、青じそ)を使った加工品や保存食品に挑戦。大根はべったら漬け、さっぱり漬にー。胡瓜は酢の物に。青じそ

はジュースにと退屈することなく過ごしています。

(和寄 はると)

眠るまでの時間を通りすぎていった人達 黒瀬 文子

▼なかなか眠れない夜は、自分の人生を通り過ぎていったたくさんの人たちのことを思い出します。そして、自分の人生は自分だけのものではなく、たくさんの人たちによって作られたものだと感じかされます。

(久光 良一)

▼コロナになって外出出来ないで運動不足と高齢になった事もあって、昔の様にずっと眠れない。それも子供の頃や若い頃に出逢った人達が目の前に現れる。もちろん名前も全く思い出されないのに懐かしい。朝、びっくりする。

(石竹 和歌子)

ずっと午前3時の街角にいる

吉本 知裕

▼午前3時の街角で、なにがあったのか。なにも書かれていない。なにも書かれていないことで、ストーリーを感じる。今の時期であれば、新型コロナウイルスに関係しているのかもかもしれない。

(野谷 真治)

苛立つ心を和ますうぐいすのつぶやき

無 一

▼住んでいる場所が、自然が多いです。早朝、鳥が鳴くのを聞き、目を覚ますこともあります。鳥の鳴き方で、何の鳥かと調べたり、観察することで学びにもなっています。

(アカホリ フキ)

真夜中の卵ふくらむ卵月

野谷 真治

▼真夜中にふくらむ卵、というイメージが魅力的です。視覚的には、卵と卵の文字の類似性がいい感じだと思えます。

(田辺 まさゆき)

みんな重くなりメガネはずして今日を見る 富永 鳩山

▼弧愁の点描であるが、どこか、道を究めた人の達観が漂い、凜とした心すまいにしてみらえる。

(縛 迎雲)

透明な殺意 全部中止

井尾 良子

▼新型コロナ殺人事件は今年のトップニュースです。見えないからこそ恐怖感が募ります。句会も、ゴルフもすべて中止、カレンダーが真っ赤です。一日も早いワクチンと治療薬の実用化を祈ります。

(白松 いちろう)

蓬草妣の背中の匂いして

植田 鬼灯

▼蓬がある所、蓬を生活で使っていた時代、そうした匂いが服に付くという日常にあつて、背中という言葉に、背負われたい作者の幼少の想い出がうたわれ、日本のある時代のノスタルジーがポエムになって、読み手が共有している記憶を刺激する。とても愛し、愛された母上への今も深い慕情が伝わってくる。赤とんぼの歌を想起させる日本人の心のポエムだ。

(部屋 慈音)

三島由紀夫を鑑た 時代に震えた

大出 匡

▼この作者はまだ若い方なのだろうか? 「鑑た」にそれを感じた。

その時代に生きていたはずの私も、いまだによくわからない。最後の行動も決して「武士道」とかたづけたいのか、きつと時代を超えて生きている人かもしれない。句材として新鮮だった。

(平岡 久美子)

早朝のバス停ハトまで集ってコロナ談義 白松 いちろう

▼2020年は世界中がコロナ禍に巻きこまれた。生活が大きく変わった。早朝のバス停に鳩が集うというのどかな情景。しかし、その背後にはしのび寄る危うさ、見えない脅威への不安がある。時代を言い得た好句。(金澤 ひろあき)

陽炎の繁栄をコロナが呑み込んで行く 金澤 ひろあき

▼戦後のめざましい日本の発展、経済優先が人々の幸福と思ひ込みがなばつてきた。それがコロナというウイルスにより日本中が呑み込まれてしまった。一人ぼっちのさみしい生活、本当の幸せとは豊かさとは何か考える時が来た。

(井尾 良子)

### ● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

〈締め切り〉 2020年10月31日

